

67-527



1200501281751



菅原時保禪師

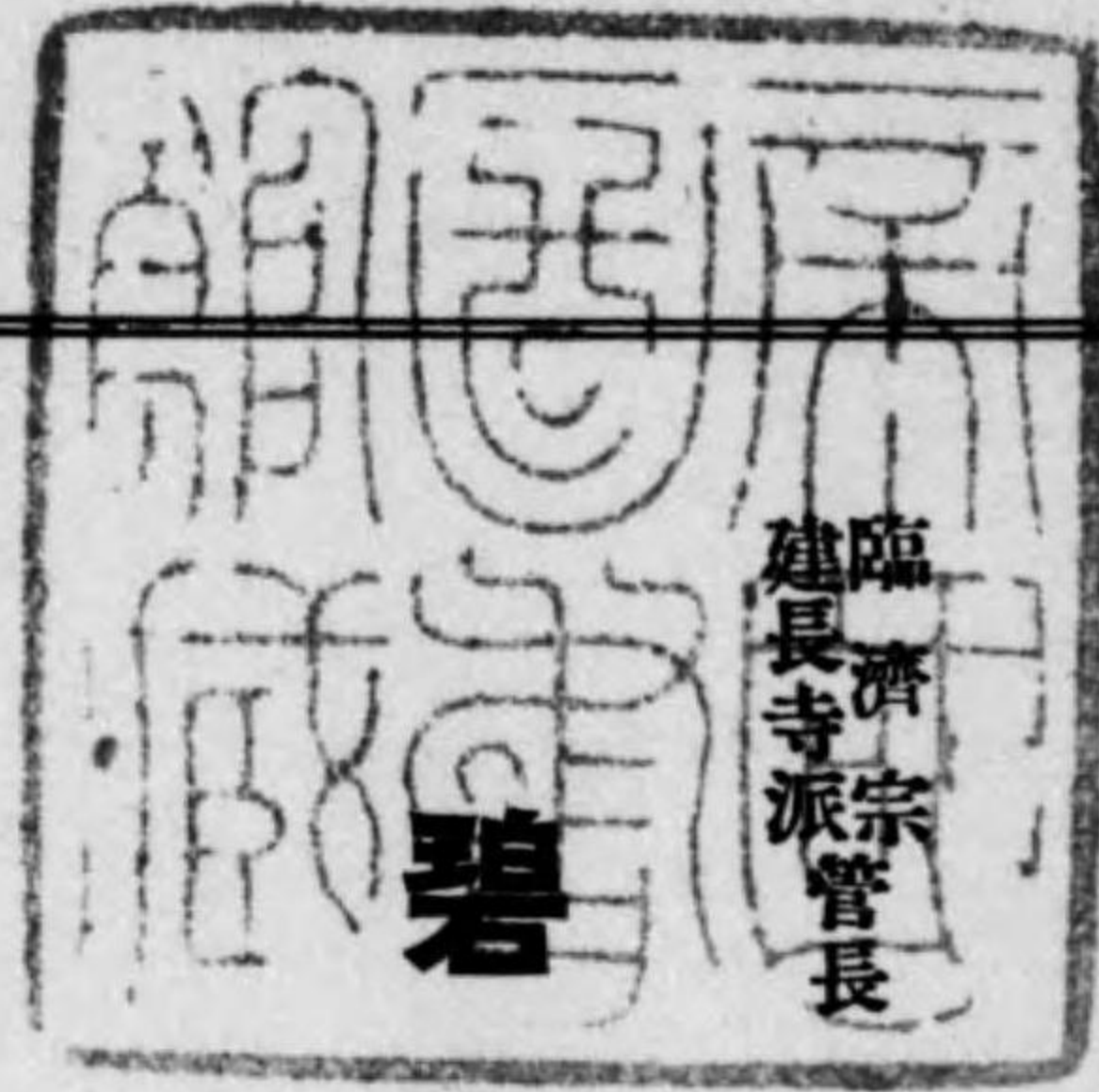
碧巖錄講演

(其五)



始





臨濟宗
建長寺派管長

菅原時保禪師

巖錄講演

(其五)



碧巖錄提講

第七則 慧超問佛

「佛、」佛には、木佛、金佛、石佛、畫佛、種々あります。――
されど、眞箇の佛は、自己、それ自身であります。」釋迦如來曰く、

草木國土悉皆成佛。

牛が涎で書きし歌に、

「草も木も佛になるとき、ぬれば

心ある身はたのもしきかな」

白隱禪師、座禪和讃に曰く、

衆生本來佛なり、水と氷のごとくにて、水をはなれて氷なく、

衆生の外に佛なし、衆生近きを知らずして、遠く求むるはかな
 さよ、たごへば、水の中にあて、渴を叫ぶがごとくなり、云々
 ごあります。

要するに、心外に佛を求めず、自己自心の佛を現出する、そ
 れが先決問題であります。

◎垂示

垂示云、聲前一句、千聖不傳、未曾親覲、如隔大千、設
 使向聲前辨得、截斷天下人舌頭、亦未是性燥漢、所以道、
 天不能蓋、地不能載、虛空不能容、日月不能照、無佛處
 獨稱尊、始較些子、其或未然、於一毫頭上透得、放大光

明、七縱八橫、於法自在自由、信手拈來、無有不是、且
 道、得箇什麼、如此奇特、復云、大衆會麼、從前汗馬無
 人識、只要重論蓋代功、即今事且致雪竇公案、又作麼生、
 看取下文、

讀方

垂示に云く、聲前の一句は、千聖不傳なり。未だ曾て親覲せ
 ざれば、大千を隔つるが如し。設使聲前に向つて辨得し、天
 下の人の舌頭を截斷するも、亦未だ是れ性燥の漢にあらず。
 所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず、
 虛空も容るゝこと能はず、日月も照すこと能はず、無佛の

處、獨り尊と稱して、始めて些子に較れり。其れ或は未だ然らず、一毫頭上に於て透得して、大光明を放ち、七縱八橫、法に於て自在自由ならば、手に信せて拈じ來つて、不是有るこそ無し。且く道へ、箇の什麼を得てか、此の如く奇特なる。復云く、大衆會すや。従前の汗馬、人の識る無し、只重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す。即今の事は且く雪竇の公案に致ぬ。又作麼生。下文を看取せよ。」

垂示の「聲前の一句、」それについて一言婆言を弄しておきませう。——圓悟禪師は、聲前の一句、千聖不傳と云ひ、盤山禪師は、向上の一路、千聖不傳と云ふ。——向上の一路と聲前

の一句と、是れ同じか是れ別か。——處かはれば品かはる、品かはれば名かはる。——何れにしても研究すべき那一物であります。

向上と云うても向下に對する向上ではない。聲前と云うても聲後に對する聲前ではありません。

或人は、「天地未開以前の事を聲前の一句と云うたのだ、天地が開けたならば、是非善惡を始めとして、長短、方圓、遠近、高低など種々雜多相對のものが現はれて來る、それであるから今茲に聲前の一句と云ふは、天地未開以前の消息にして、總て長短だの、方圓だの、青黃だの、黑白だの、是非善惡得失だの

と云ふ相對を離れた一句の事である、」と云はるゝが、果して然りや。——何れにせよ、聲前の一句、向上の一路は、通俗的に云へば、宇宙の實體、神の本體、佛の命脈、と云ふ處であります。それを禪學上の術語で、向上の一路、聲前の一句、と云ふ、と心得たならば大なる相違はありません。

大内居士は、三世諸佛のまだ出世せざる以前に八萬四千の法門がある、それが聲前の一句である、と垂示されました。それも或は聲前の一句であるかも知れぬ。——衲衲は云ふ、見性せざる以前は總て妄想、見性したる以後は悉く、聲前の一句なり、と。

——次に、「從前汗馬無人識、只要重論蓋代功、」これに一言、

を添へておきます。此詩の起承二句は、「六國平來一瞬中、心王不動通八方、」と云ふのであります。全部は東山外集に出て居ります。意味は汗馬の勞に依つて秦平が得られると云ふのであります。

汗馬の勞がなければ、秦平は得られません。諸君既に御承知の如く、日本の今日あるは、維新の當時、天皇陛下を始め多くの憂國志士、愛國勇士が、生命を鴻毛より輕んじ維新を計られた其賜であります。更に日清、日露、日獨の各戦役で汗馬の勞を盡されたから日本國も世界に認識された。若し手を袖にして汗馬の勞を盡さざれば到底今日の様な立派な日本國は見られま

せん。蓋代の大功を奏するには是非とも骨を折らなければなりません。大いに骨を折れば大いに骨を折るほど大功を奏するところが出来ます。禪學の修行も、法戰と云ふ位でありますから、無論汗馬の勞を積まざれば、胸中平穩なることは出来ません。」例せば、雪竇禪師が「二十年來曾て苦辛し、君が爲に幾度か蒼龍窟に下りぬ。」と自己の修行底を自白なされた。實を云へば、禪の修行は砲煙彈雨の戦争より更に大なる辛苦があります。それは門外の人には到底わかりません。只要重論蓋代功、事實汗馬の勞を経て大なる軍功ありや否やは、愈々論功の時でなければ決定しません。それと同じく禪の悟道底、又修行の熟不熟、

明眼みやまひんの師家に鑑定をして頂かなければ、悟の眞偽、修行の徹不徹、は判明致しません。戦争の論功が自分自身で出来ぬと同じく、禪の論功も亦復然りであります。

重は、再びの意でなく、重用、重賞の重で、禪學修行者の急務は、骨折骨折、刻苦光明必盛大也、で、努力努力刻苦刻苦、刻苦が泰平を來す、努力が蓋代の功を奏します。——暫時もあらざれば死人に如同す。——如同の死人でなく禪學者は是非とも蒲團上に於て大死一番せざるべからず。蒲團上に於て大死一番、それが禪學者の汗馬の勞である。それが禪學者の蓋代の功を奏して胸中を泰平にする所以であります。

禪を研究する人の第一條件は、擧一明三の知見解を要します。然らざれば禪そのもの、妙境に達し、禪そのもの、妙味を賞讃するところは出来ません。既に知らるゝ如く、禪語の總てが簡單の上にも更に簡單、無造作の上にも更に無造作であります。故に擧一明三の知見解がなければ、多くは不得要領を以て終始するところになります。——此則の垂示の如きが抑、其一例であります。——茲に、聲前の一句、ごあるが必ずしも聲前の一句に限りは致しません。聲前の一句の中に、聲中の一句も、聲後の一句も、又は色前の一句も、色中の一句も、色後の一句も、又は香前の一句も、香中の一句も、香後の一句も、又は味前の

一句も、味中の一句も、味後の一句も、其他觸等の一句が悉く含有されて居ります。それを忘れてはならぬ。——

恁麼の次第でありますから、言語道斷、心行所滅の處に至れば、禪僧の立場として、不相變、以心傳心、冷暖自知、と聲明するのが常であります。決して以心傳心と云ふそれが遁辭でないと共に冷暖自知と云ふのも欺語ではありません。——眞の妙味に至つては、事實、冷暖自知、——以心傳心するより佛祖の方便も聖賢の手段も、皆無であり絶無であります。只自力あるのみ、只自修あるのみ、只自覺自證あるのみ。神に向つて助力を仰ぐ勿れ、佛に對して輔佐を祈る勿れ。仰ぐも無駄、——

祈るも無功德。——何が故ぞ。千聖も從來不傳底であり、ます。

されど、禪の妙境、禪の妙味は、十萬億土の遠方にあるに非ず、五十六億七千萬年の後にあるに非ず、人々具足、箇々圓成、——極めて近きが故に知る能はず、至つて易きが故に等閑に附し易いのであります。それが爲に知る能はず、得る能はず、故に千聖不傳の禪味を喫しながら、くる年も、くる日も煩惱妄想堆中に自分と自分で、無繩自縛の不自由を甘受して居るのであります。——一回自己本來の面目に相見し來りますれば、一切の聲は悉く自己の聲となり、一切の色は悉く自己の色とな

り、一切の香は悉く自己の香となり、一切の味は悉く自己の味となり、一切の觸は悉く自己の觸となります。」「苟も茲に至れば、肇法師の「天地と我と同根、萬物と我と一體、」と云はれし句は、云ひ得て未だ妙ならず、語り得て未だ盡さず、——事實上、天地と我と同根となり、實際上、萬物と我と同體となります。——恁麼なる能はざる人は、未だ曾て本來の面目に親觀せざる人、其人は常に恒に千聖不傳底の聲前句中しやうぜんに起臥眠食しながら、聲前の一句と自己との中間に、三千大千世界を置くが如く、大なる隔りがあります。残念ながらお互は或はその同伴であるかも知れません。——多くのお人の中には、生れながらにし

て、禪機を具し、又は拔群の智者で、格別禪の修養に歲月を重ねずして、禪の禪理、道の道理を自由自在に、筆端に舌頭に、書寫もし論談もし、天下の人のウンともスンとも云ふことの出来ぬやうにする人もあります。されど、其人を禪の立場からは、性燥の漢ごも伶俐の人ごも賞讃するわけにはまありません。其理由如何ごなれば、古人の言葉に「聲前の一句は天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず、虚空も容るゝこと能はず、日月も照すこと能はず、無佛の處、獨り尊ご稱して、始めて些子に較^あれり、」ごあるを見ても、筆端に聲前の一句を書寫し、舌頭に聲前の一句を論談し得るご雖も、それは或一部の人の舌頭を

截斷するのみ。眞箇聲前の一句を我がものにしたごは云はれませんが。圓悟禪師をして忌憚なく云はしむれば、古人は「天も蓋ふごご能はず乃至些子に較れり、」ご無佛獨尊底を頗る賛成なされたが、イヤハヤ、其様な處に尻を止めて居ては些子にも何にもあたつては居らぬ。眞箇些子に較^あらんご欲せば、少くごも左の如くならざる可からず、ご。

世間には山岳震動して鼠一匹、乾坤一擲して虱三匹、ご云ふ事實が到る處に實現して居ります。然るに出世間、我が禪門に於ては、それご正反對、一莖草、一枝花、又は一微塵、それを通じて宇宙の眞理、聲前の一句の妙諦を全然我がものに身心脱落、脱落

身心、之是の身心脱落、脱落心身の靈活妙境より顯現する總ての動作は、一々大光明を放つて盡十方世界を照破し、妙智妙行の身心兩界に於て、自由自在、無礙圓融なる其様子は、七縱八横も、横拈倒用も到底匹儔すべきものではありません。手に任せて拈じ来る、その總てが矩を踰えずでなく、その總てが即矩となり、逆行反動、それが一々宇宙の妙諦、それを佛云はんか佛以上、神云はんか神以上、——斯の如き超人的の活作活動は、畢竟如何なるものを手に入れて然るのであります。——と一座の聽講者に向つて圓悟禪師質問の矢を放たれました。處が誰一人として是に應對するものがありません。何れも相談したか

の如く沈黙して居ります。その様子は啞人のそれでありませぬ。圓悟禪師は更に言葉を續けて曰く、従前の汗馬、人の識る無し、只重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す、——と。

蓋代の戦功、その眞偽は論功なさる將軍の活眼に一任して始めて明瞭になるが如く、禪學蓋代の戦功も、其眞偽如何は明眼の正師家に宜しく決斷をお任せするが蓋し其策を得たるものがあります。即今何人に一任する。曰く、雪竇禪師の拈出なされた、その公案、それに依つて各自の戦功を論じて見るがよろしい。

◎本則

舉、僧問法眼、慧超咨和尚、如何是佛、法眼云、汝是慧超、

讀方

舉す。僧、法眼ほうげんに問ふ、「慧超まてう、和尚はがに咨る、如何なるか是れ佛。」法眼ほうげん云く、「汝は是れ慧超。」

本則の正師家、法眼和尚は、雲門禪師と同時代のお人で、雪峰禪師より宗旨は出て居ります。禪僧中の錚々たる人物、禪宗五家の一たる法眼宗の開祖であります。學者の接化、爲人じん度生底は、箭鋒相拄、——啐啄同時、——を活用なされます。法眼と云ふ名前の字を拜見したゞけて對機の説法をなされたお人たることが分明であります。其對機底の一例を左に舉揚して學

者の參考に供しませう。

玄則と云ふ和尚が、法眼の處に三年も監寺を勤めてをられました。或日、法眼が、玄則に向つて、お前は私の處に何年居らるか、と問ふ。玄則曰く、三年。フウ三年も居れば何か問ひさうなものだ、何も問はぬはごういふ譯である。玄則曰く、私は嘗て青峰志圓禪師の處で悟つて居りますからお問ひ申しません。それでは青峰の處で悟つたと云ふ、其悟りを云うて見なさい。」私は青峰和尚に、如何なるか是れ學人の自己、と問ひました。すると青峰和尚曰く、「丙丁童子來求火、」と答へられました。その時、悟りました。——法眼曰く、成程、「丙丁童子來求火、」

至極結構、しかし貴殿はまだ悟つては居らぬ、と叱りつけますると、玄則は「丙丁童子來求火」の講譯を始めました。——すると法眼禪師曰く、そんな事が佛法なら、今日まで佛法は相續して居らぬ、と再び叱りつけられましたから、玄則大いに憤怒して其の處を去りました。——暫くして思へらく、法眼と云ふお人は、苟も一千五百人の善智識と云はれるお方である、是には何か仔細があるに相違ない、と我慢の角を折つて再び歸つて法眼禪師に向つて、如何なるか是れ學人の自己、と前と同じ事を問ひました。法眼禪師曰く、「丙丁童子來求火」と青峰の答と同じ答でありました。然るに玄則は言下に於て忽然大悟、

今度は本當に悟りました。」と本に書いてあります。

ある日一人の僧が、法眼文益禪師のところによつて来て、一問を發して曰く、「私は慧超みえうと云ふ青小僧でありますが、大和尚様に御相談を申し上げます、佛様と申すお方は元來如何なるお人でありますか。」(謙遜の態度を以て問うた處に慧超の慧超たる面目が活躍して居ります、と或人は讚賞されました、如何にもであります。)すると法眼禪師は佛の説明をしないで、「お前は慧超だ、」と答へられました。——ここに法眼禪師の宗意が顯現して居ります。慧超は、お前は慧超だ、と云はれた處で大悟徹底されました。

或人は云ふ、慧超ご云ふ時は、佛は慧超に藏れ、佛ご云ふ時は慧超が藏れる、ご、恁麼の道理もないことはありません。——それは所謂、文字禪、——道理禪で、眞箇の正禪ではありません。——慧超の如きは、豫てより修行に辛苦を積んで居られたから、法眼禪師の一言下に悟られたのであります。垂示にある従前の汗馬、その勞苦に報いた蓋代の功であります。慧超にして法眼禪師に逢着せざれば、汗馬の勞ありご雖も、蓋代の功を顯はすことは出来ません。禪に志す人は、古人に預けて置かず、自分自分に汗馬の勞を重ねるが何よりであります。井上君は、「仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣。」ご云ふ經書の句を引き

佛を遠きにもごめ神を天國にもごむるは愚の極なるものご云はれました。至つて御親切の御忠告であります。

◎頌

江國春風吹不起、 鷓鴣啼在深花裡、 三級浪高魚化龍、 癡人
猶辱夜塘水、

讀方

江國の春風、吹けごも起まらず、鷓鴣啼いて深花の裡にあり。
三級の浪高くして魚龍ご化す、癡人猶辱む夜塘の水。」

「鷓鴣啼、在、深、花、裡、」此句につき一言、私に云はして頂きます。「
梅に鶯、—— 竹に雀、法眼に慧超。——

花は、やごすとも思はず、鶯は、やごるとも思はず、――

竹も雀も、法眼ほうげんも慧超えいちょうも、亦復然りであります。飯田君は、法眼と慧超と水も漏らさぬ間柄を形容したのだと古今の適評だが、及ばぬこと遠くして遠しと云うて居らるゝ。無論形容したなごと思はゞ大なる錯誤である。――大内居士は、江國の春

風吹き起たたず、鷓鴣啼いて深花裡に在り、只この通りの端的よ、繰り返して朗吟して見るが好い、自分で吟じて自分の耳に聞くうちに獨りニ、コリと笑ふ所が出来る、と云うて居らるゝ、是も事實であります。宗演師は、慧超は牛に騎つて居ながら、其牛を宛めて居る。百花爛漫たる中に在りて、猶春を探さんとして

居るが、春は枝頭に在つて既に十分である。法眼禪師は江國の春風吹き起る處に鷓鴣の花裡に轉まるを聞いて楽しんで居る、と示されました。是も味ふべき言句であります。

事實、眞箇の處を覺知せんと欲せば、法眼になるべし、慧超になるべし、雪竇になるべし、春風になるべし、鷓鴣になるべし。

然らざれば、何と云うても總てが是れ錯、錯、錯。――

以下、頌について説明致します。

雪竇禪師は、法眼禪師と慧超禪師と一問答の下で、師資契投された啐啄底と、聲前の一句、兼て宇宙の眞理、本來の面目、神のお姿、佛の本體を併せ頌じて曰く、「江國春風吹不起、鷓鴣

啼、在、深、花、裡、」と。——自然の現成を以て吟じ來り頌じ去られた處に雪竇禪師の隱し藝が分明に現出して居ります。諸君見えますか。——「常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香、」と云ふ句があります。雪竇禪師の江國春風云々と異曲同工でありますぞ。

——諸君の知らるゝ如く私の住して居ります處は鎌倉であります。「鎌倉と聞いて極樂、見て地獄、慈悲なき里に寺の多さよ。」と云ふ位に寺は澤山あります。併し其割に布教化導が不充分と見えて、在住のお人の多くは無慈悲だぞ外から云はれてをります。されど、日本、否、世界の名所舊跡であるが爲に參拜の人や、見物の人や、探見の人や、見學の生徒が、春夏秋冬を

通じて、日々群集致します。特に春は格別であります。それも、そのはず、「江國春風吹不起、鷓鴣啼在深花裡、」と云ふ眞箇の情景がこゝぞご思うて雙美雙善の全部を舉揚して來賓看客に呈供して居ります。——試みに、其一斑を語つて見ませう。

——面を吹けども寒からずと云ふ肌ざはりの頗るよろしい春風が、そよそよ、柳は暗く、花は明かに、——山と云ふ山、丘と云ふ丘、——何れも青煙の幕を張り、綠雲の戸を連れ、——朱門白屋、神社佛閣、——悉く香雲につつまれ、總て暖霞にかへぎられ、——天然の活畫、——以上の活畫、——自然の詩景、——以上の詩景、——鶯は妙法華經を囀じ、

鳥は孝經を讀み、雀は忠を唱へ、鳩は法を呼び、泰平の和氣乎、聖時の鴻恩乎、泰平の和氣茲にあります、聖時の鴻恩茲に来る。無懷氏以上、葛天子以上。

若し昔の雪竇禪師をして、私の住居する鎌倉の春時にあらしめ、慧超問佛の本則に、一頌を下さしめたならば、無論現在こゝにある江國春風云々より數等すぐれたる名吟が出来たことではありません。

閑妄想は中止として、次に移ります。轉結の二句は、起承二句の餘響であります。餘響は正音あつての餘響、故に正

音大なれば随つて餘響も又大であります。「三級浪高魚化龍、癡人猶辱夜塘水」鯉は既に龍さ化し去れり。癡人はそれを知らずして夜塘の水を辱んでをる、と云ふ意味を恁厯の如き金句玉韻に吟出することは雪竇禪師に非ざれば出来ぬことであります。

法眼禪師は既に禹門三級の浪を跳出して、龍も龍も龍中の大龍。故に一滴の水を以て四大海に雨ふらすと云ふ大神通を得て常に禪界の大世界を睥睨して居らるゝ。然るに憐むべし、慧超禪師は、未だ禹門三級の浪を跳出する能はず、所謂池中の物、それが、法眼禪師に、汝は是れ慧超、と云はれて一言下に於て大悟、鯉魚化して龍さになりました。目出度し目

出度し。斯くなれば慧超禪師も池中の物に非ずであります。鯉魚化して龍となるも其鱗を増さず、人は悟つて佛となるも其身を變ぜず。——人々龍になれます、箇々佛になれます、なれる佛にならず、なれる龍にならず、——自分ご自分で、鯉魚となり、凡夫となり、自由を強ひて不自由にし、自在を好んで不自在に、——それが昔も今も、東洋も西洋もであります。之を指して癡人猶辱夜塘水と申します。無論茲に居るお互も其中の或は一人であるかも知れません。」

(以上昭和十一年十月二十四日講演)

第八則 翠岩眉毛

「相識滿天下、知心能幾人、」ご云ふ句がありますが、實際、我が胸中を洞察し得る知音は極めて少數であります。苟も我れ彼れを知り、彼れ我れを知ることこの出来るのは同火の親交ある者に限ります。古句に「若不同床臥、爭知被底穿、」ごあるが如く同食同居同臥した人でなければ眞箇の知音ごは云はれません。「驗人端的處、下口即知音、」ご云ふが如く意氣相投合する人は、長い間、辛苦艱難を共にした人々であります。是より提講致します翠岩一家の如きが、能く幾人ぞご云ふ稀にある知心家ご、同床

三三二
に臥して、被底の穿つを、知りたる、同火の人と、口を下せば、即ち知音と云ふ、それらの人の同唱同和同樂底であります。

◎垂示

垂示云、會則途中受用、如龍得水、似虎靠山、不會則世諦流布、羝羊觸藩、守株待兔、有時一句、如踞地獅子、有時一句、如金剛王寶劍、有時一句、坐斷天下人舌頭、有時一句、隨波逐浪、若也途中受用、遇知音、別機宜、識休咎、相共證明、若也世諦流布、具一隻眼、可以坐斷十方壁立千仞、所以道、大用現前、不存軌則、有時將一莖草、作丈六金身用、有時將丈六金身、作一莖草用、且道、憑箇什

麼道理、還委悉麼、試舉看、

讀方

垂示に云く、會すれば則ち途中受用、龍の水を得たるが如く、虎の山に靠れるに似たり。會せざれば則ち世諦流布、羝羊藩に觸れ、株を守つて兔を待つ。有時の一句は踞地獅子の如く、有時の一句は金剛王の寶劍の如く、有時の一句は天下の人の舌頭を坐斷し、有時の一句は波に随つて浪を逐ふ。若し也途中受用ならば、知音に遇つて機宜を別ち、休咎を識つて、相共に證明す。若し也世諦流布ならば、一隻眼を具して以て十方を坐斷し、壁立千仞なる可し。所以に道ふ、大用現前、

軌則を存せず。有時には一莖草を將つて丈六の金身と作して用ひ、有時には丈六の金身を將つて一莖草と作して用ふ。且く道へ、箇の什麼の道理にか憑る。還委悉すや。試みに舉す看よ。」

茲に一言添へて置きます。

將一莖草作丈六金身、是は神通に非ず、心然的。

將丈六金身作一莖草、是は自然に非ず、妙用なり。

丈六の金身とは、釋迦如來のこゝ、佛の身の丈、一丈六尺にして、その色は、紫磨金色、故に丈六の金身と云ひます。」

一莖草とは、野原に生ひ茂つて居る尋常の草、「名なき一莖草

と、有名なる丈六の金身と、云は、提灯に釣鐘、似ざるも似ざるも、似ざるもの、最第一であります。然るに不思議にも、それを無碍自在に圓融し交換する、是が大用でなくて何である。是を軌則以外の活軌則、方便以外の活方便と云ふ。—— 恁麼の大用現前底の活作略、活方便がなければ、爲人度生は出来ません。苟も三界の大導師たる人は、小を以て大となし、長を以て短となし、火を拈じて水となし、水を拈じて火となす、と云ふ神通妙用を具せざるべからず。

此本則は、碧巖録中の難透としてあります。必ずしも此則に限りません。會得せざる以前は、何の則も悉く難透、—— 會

得ずれば何れの則も總て不難透であります。——此垂示を古來三段に分けて見ることになつて居ります。「第一段は、「會則……待兔、」是は學者の得失を説き、第二段、「有時……千仞、」是は師家の作略、第三段、「所以道」より以下は、作家の爲人三昧の自由底。——古德云く、「正人邪法を説けば、邪法も正法となり、邪人正法を説けば、正法も邪法となる。」と、又曰く、「大悟せざる以前の善悪は共に悪、大悟したる以後の善悪は共に善、」とあります。故に知るべし、大悟して正人にならざる可からず。」蓋し會不會の三字は善悪邪正の分岐點であります。

飯田君云く、眞の會は無理會でなければならぬ、大燈國師も

「只向無理會處究來究去、」と云うて居らるゝ、と證據を上げて垂示された。實に然りであります。會得とか合點とか云へば世間と同じでありますが、其意味に雲泥の差があることを忘れてはなりません。「兔に角、會すとは自己を忘れて其物になりきつた處、眞箇心境一如、物我不二、になつた當體、言を換へて云へば、宇宙の眞理を把握した、それあります。

途中受用の、途中は臨濟禪師が家舎に對して云うて居られます。家舎とは自受用、——途中とは他受用、——自受用は向上の修行門にして上求菩提、——他受用は向下の布教門にして下化衆生。——故に茲にある途中受用は、向上の修行門を

透過して、向下の布教門に活動する、その様を云うたものであります。敢て聖人賢人には限りません。必ずしも智者學者に限りません。如何なる人でも、一旦無理會の處に向つて會得したならば、其自在底、龍の水を得たるが如く、其威嚴底、虎の山に靠れるに似たりで、それはそれは可仰可尊であります。——昔時は問はず、現今宇宙の大眞理を把捉したの、禪の堂奥に到達したの云ふ人にして龍の水を得たる如く虎の山に靠れるに似たる大自在もなければ大威嚴もありません。かゝるお方は必ず宇宙の大眞理を書物の上で把捉し、禪の堂奥を夢に見たのでありませう。——その夢に見た人、書物の上で把捉した人は、

眞箇會した人に比すれば、會せざるお人であります。その會せざる人は如何に知解を振つても、如何に議論を戦はしても、如何に悟境を展開しても、元來が眞箇徹底して居らないのであります。云はゞ口頭禪、文字禪でありますから、こゝぞ云ふ晴の場合に臨んで、二進も三進もならぬことは羝羊の藩に觸るゝ底、兎に僥倖した宋人の、それでありませう。現今到る處に、羝羊の藩に觸るゝ底の人、兎に僥倖して株を守る人、其多きを如何せん。——飲んで自己を忘じ心境一如、物我不二に到達した人の威嚴ある活動を見るがよい、實に愉快であり、實に壯快であります。——その愉快さ、——その壯快さ、——踞

地獅子の如く、觸るれば一口に、——金剛王寶劍の如く、さはれば眞向梨割、——片言隻語を以て天下の人の舌頭を坐斷し、——一機一境、——無業和尚となり瑞岩禪師となり隨波逐浪、——左之右之が大道そのもの、——舉手投足が眞理そのもの、——眞理全體の活動、大道全部の活行、——故に愉快中の大愉快、壯快中の大壯快であります。——特に會者と會者と遭遇し、互に途中受用底を交換する場合は又格別、——山と呼べば川と應じ、——ヤアく、オウく、それで百千萬言、云うたより以上の効果があります。是を同生同死底の人と云ひ、是を知己知音底の人と云ふのであります。

若し夫れ無眼子の學人に逢着した其時は、遠慮は無用、法の爲め、人の爲め、點滴も施さず、棒を振り喝を下し、銀山鐵壁、彼をして近前せしめず、壁立千仞、他をして茫然たらしむ。是が無眼子の學人を化度する無上の大慈悲であります。——諸君始めて聞いたであります、禪家の大慈悲は、世間の大慈悲と大なる正反對であることを。——故に先般も、大用現前軌則を存せず、と云うて措きました。——紋切形や規則に投頭して居る様なことでは、四生六凡はおろか、虱一匹も濟度は出來ません。三界の有情を彼岸に導かんを欲せば、大機大用あるのみ。——或時は與へ、或時は奪ひ、又は殺し、又は活し、

「有意氣時添意氣、」決して悪しからず、「不風流處也風流、」頗る興味あり。——一莖草が丈六の金身を現じ、丈六の金身が一莖草となる、孤峰頂上それもよし、十字街頭これもよし、頭々、物々、一々大光明を放つ、之是を佛行と云ひ、之是を祖行と云ふ、恁麼の趣味、恁麼の境界、畢竟何の道理によりて、體得するや、諸君わかりましたか、永々老婆の臭口を弄しましたから無論お手に入つたとは思ひますが、萬一お手に入らぬお人があつたなら次に擧揚致します翠岩師資の本則を見て、其妙處を覺得するがよろしい。——

從容録に、萬松老人垂示して曰く、「血を含んで、人に嘔く、自ら其口を汚す。」宗門の師家が學者を接する、その親切底、赤心片々の血を嘔いて人の爲にし、自ら其口を汚すを忘れ、「一杯を貪つて、一世人の債を償ふ。」酒量家は好んで酒を呑み他にも亦強ひて杯をすゝめ、一生の間、借金尻拭ひをして暮すといふ。——これと同じく師家たる者は、一生他の爲にして、自己の醜きを忘るゝ。——以上の二句、翠岩禪師、その人の爲人度生底を云うたものであります。胸に浮びしま、茲に附記して學者の一考に供した次第であります。

◎本則

擧、翠岩、夏末示衆云、一夏以來、爲兄弟說話、看、翠岩眉毛

在麼、保福云、作賊人心虛、」長慶云、生也、」雲門云、關、」

讀方

擧す、翠岩夏末びまうに示衆して云く、「一夏び以來、兄弟ひんていの爲に説話したり。看よ、翠岩の眉毛在りや。」保福云く、「賊なを作る人は心虚いっはる。」長慶云く、「生ぜり。」雲門云く、「關くわん。」

東嶺禪師は此則を評して、翠岩、保福、長慶、雲門、雪峰門下、共に一堂に頭を聚めて、互に祖庭の春色をなす、と云うて居られます。

實全師は、家富みて少子驕り、國霸にして謀臣多しとは、雪峰下の謂にして、翠岩を主と爲し、保福左に、長慶右に、雲門

殿後となりて、舉覺商量に心機を竭盡し、互に鷲股に肉を剗り、針頭に鐵を削る、孰れも腕利きの揃ひである、と云ふ。

東嶺禪師と云ひ、實全師と云ひ、何れも堂々たる天下の大宗師家、本則の全體を評し得て好し、語り得て當れり。されど、地下にをらる、翠岩、保福、長慶、雲門、果して喜悅するや否やは疑問であります。疑問は疑問として、放下着。

翠岩禪師曰く、「一夏以來兄弟の爲に説話す。」一夏九旬の間、言語道斷、心行所滅、その正法を横説堅説、諸君の爲は云ひながら、家醜を外に向つて揚ぐ、其罪九死に當る、幸に死せざるを得たが、無論法罰にて翠岩が眉毛は墮落したことであら

う。——「看よ翠岩が眉毛在りや。」サア諸君、しつかご見定めてもらひたい、ご。臨濟禪師が赤肉團上に一無位の真人あり、常に汝等諸人の面門より出入す證據せざる者は看よく、と自己の醜顔を無遠慮に大衆面前に、ニューご差し出されたご、異曲同工。——可謂、牛に似て雙角多く、虎の如くにして、巴鼻を缺く、——と。

本則の主眼は、眉毛在りや、——それでありませう。主眼がわかるご、保福、長慶、雲門、三人の狐も一つ穴の狐なるごがわかります。宗師家の一言一句は、無論人の爲に縛を解き粘を脱せしむるにあります。諸君、云うて見たまへ。翠岩禪師の意

旨何れの處に在る。——さすが同火の保福だ、翠岩禪師の高く懸けられた金的に向つて一矢を放つた。「作賊人心虚、」ご是れの中か正鵠に非ずご雖も全く的外に非ず。——ヤイ此の泥棒め、——果して翠岩禪師は泥棒か、保福は何れの處を見て、翠岩禪師を泥棒とした。保福の胸中を點見するは、お互の眼力にあります。諸君保福の胸中を何と見ました。——是れ亦泥棒に非ずや。長慶は「生也、」ご二番目に矢を放つた。當らずご雖も遠からず、否、遠からずと雖も當らず。何が故ぞ。曰く、眉毛につくからであります。——

翠岩禪師、御心配御無用、眉毛は房々ご生えて居ります。之

れは親泥棒の巾着を子泥棒がヌキ取つた様なものだ。長慶も可
 なりの白拈賊びやくけんぞうであります。翠岩禪師、定めて胸中微笑されたで
 ありませう。最後に雲門云く、關。——古人の句に「匹夫而
 爲百世師、一言而爲天下法」とあります。蓋し雲門禪師の如き
 が、その人であります。看よ、全體作用の一字關。——聞け、
 よ、脱體現成の一字關。——關そのもの、前には天無く地無
 く、古往今來も自身も何もかも一切、總てが關そのものであ
 る。故に關そのもの、面前には佛祖と雖も面出しは出來ぬ。況
 んや其他のものに於てをや。——されど、瞋拳は笑面を打さ
 ず、——宦不入針、私通車馬、——表では表、裏は裏、

裏にはヌケ路はないぞ。——雲門禪師の關あるが爲に此一
 則、龍頭龍尾たることを得ました。若し雲門の一關なかりせば、
 始めは脱兔、終りは或は處女の如し。嗚呼幸なるかな、嗚呼。
 ——即今雲門の關字、畢竟何れの處にかある。諸君鼓を打つ
 て、普請して見たまへ。——關。——以上翠岩禪師、保福、
 長慶、雲門、東嶺禪師の評せし如く、祖庭の春色か。——
 實全師の云はるゝ如く舉覺の商量か。——祖庭の春色と云は
 ゝ祖庭の春色、舉覺の商量と云はゝ舉覺の商量、古人底は古人
 底として、即今現在底、試みに自己の胸中より吐露し來れ、
 ——謂ふこと勿れ、賊、賊を知るこ。——謂ふこと勿れ、

三人證龜爲鼈、こ。

五〇

◎頌

翠岩示徒、千古無對、關字相酬、失錢遭罪、潦倒保福、抑揚難得、嘵嘵翠岩、分明是賊、白圭無玷、誰辨真假、長慶相諳、眉毛生也、

讀方

翠岩、徒に示す、千古對無し。關字相酬ゆ、錢を失うて罪に遭ふ。潦倒たる保福、抑揚得難し。嘵々たる翠岩、分明に是れ賊。白圭玷無し、誰か眞假を辨ぜん。長慶相諳んず、眉毛生ぜり。」

雪竇禪師は例に依つて例の如く、詩禪雙美の眞面目を發揮して曰く、

「翠岩示徒、千古無對、」翠岩禪師が大眾に向つて眉毛ありやと云ひつゝ、突出なされた神頭鬼面、その様子を千古無類、空前絶後、——山で云は、富士山、劍で云は、金剛王寶劍、如何なる山でも富士に對して、顔色無く、如何なる名劍でも、金剛王寶劍に逢つては、倒退三千。——斯く翠岩禪師を九天の上迄押し上げた。押し上げられた翠岩禪師、油斷はなりません、油斷は大敵。——敢て翠岩禪師が油斷をしたと云ふでなし、必ずしも雲門禪師が大敵と云ふ譯でもありません。されど翠岩禪師

五一

の眉毛在也に對して、雲門禪師、蓋天蓋地を一箇の關として、
 關、——と相酬ゆ、是ぞ大敵以外の大敵である。如何なるも
 のも此關に逢うては只是れ命を乞ふ。——とは云ふもの、正
 眼に觀じ來れば大失敗。——何が故ぞ、翠岩禪師は元より雲
 門禪師も、錢を失うて罪に遭ふ御連中、——斯く云ふ私も無
 論のここ。——眉毛在也に對して、作賊人心虚と云うた保福
 禪師は、いやはや、老ばれ、おちぶれ、抑揚難得、ほめたのか、
 そしつたのか、底意がわからぬ、否、ほめても、そしつても、
 抑揚難得で翠岩禪師を如何ともすることは出來ぬ。——實
 を云へば翠岩禪師の示衆、千古無對と云うたのも、饒舌翠岩、

分明是賊であります。賊も賊も白日に馬の眼でなく、人の眼も
 佛祖の眼もぬく大白拈賊、——潦倒たる保福禪師が後押しを
 して、曾て九天上まで押し上げた翠岩禪師を今九泉の下に押し
 落した、是が雪竇禪師の詩禪雙善の活作略（きやくりやく）であります。とは云
 ふもの、詩禪雙善が雪竇禪師の長所にして又短所であります。
 「白圭無玷、誰辨真假、」佛にあつても増さず、凡夫にあつても
 減ぜず、元來無玷、何ぞ真假を論ぜん。翠岩禪師は翠岩禪師で
 白圭無玷、保福は保福、長慶は長慶、雲門は雲門、何れも白圭
 無玷。——今は特に翠岩禪師の心底を云ふ、海神貴を知つて
 價を知らずで、白圭無玷のことは或は知るならん。然れども其

價值を知る人少し。苟も其價值を知らんと欲せば先づ以て玉の眞偽を知らざるべからず。」

飯田君云く、白圭無玷を知らんと欲せば、自ら無玷にならねばならぬ、ご如何にも然りであります。翠岩禪師の眉毛生也を知らんと欲せば、自ら翠岩禪師にならねばならぬ。「諸君如何にしたら翠岩禪師になれますか。——長慶相諳、——諸君は御存知ないかも知れぬが長慶禪師は能く翠岩禪師の心底を御存知である。其證據には、公衆面前で鑒識眼を以て寸分違はぬ處を云はれました。云く眉毛生也。——

翠岩禪師は長慶の眉毛生也と云はれたので大安なされたかも知

知れぬ。——諸君も眉毛生也、御安心なさい。眉毛がなければ○○でありますぞ。ごなたも眼上に眉毛八字に打開して居ります。見よ、曇華が眉毛在也。——

天童禪師は、此則を頌して左の如く吟じて居られます。作賊心、過人膽、歷々縦横對機感、保福雲門也垂鼻欺唇、(垂鼻欺唇、とは鼻が長く垂れてゐて唇が見まがふ、如何にも、のんびりしたと云ふことであります。)翠岩長慶也脩眉映眼、(脩眉映眼とは眉毛が長くのびてゐて眼球にうつって見える、如何にも福徳の相があると云ふこと。)杜禪和有何限、剛道意句一齊割、埋没自己也飲氣吞聲、「帶累先宗也面牆擔板、」ごあります。序

を以て相添へました。臭口多謝多謝。」

(以上昭和十一年十一月七日講演)

第九則 趙州四門

「誰が家の竈裡にか火に煙なからん」、で赤門白屋、何人の家でも御飯を炊いて喫しまするが如く、人ご云ふ人は、貴賤貧富を問はず、何人ご雖も一面の古鏡、一振りの寶劍は、天然的に所持して居ります。其古鏡は以て善悪を分別すべきもの、其寶劍は以て是非を切斷すべきものであります。

然るに多くの人は、本具の古鏡をくらし、固有の寶劍をさびらかし、分別すべき善悪を分明せず、切斷すべき是非を切斷せざるは、實に氣の毒の至りであります。敢て人様のここではありません。お互が如來藏より古鏡を取り出し、金剛藏より寶

劍を持ち來り、善惡を能く分別し、是非を能く切斷して、咄哉、咄哉、三界輪廻を超出し、四生六凡の衆生と共に成佛作祖致しませう。

◎垂示

垂示云、明鏡當臺、妍醜自辨、鑊鄒在手、殺活臨時、漢去胡來、胡來漢去、死中得活、活中得死、且道、到這裏又作麼生、若無透關底眼轉身處、到這裏、灼然不奈何、且道、如何是透關底眼轉身處、試舉看、

讀方

垂示云く、明鏡、臺に當れば、妍醜自ら辨じ、鑊鄒、手に在

れば、殺活、時に臨む。漢去れば胡來り、胡來れば漢去り、死中に活を得、活中に死を得。且く道へ、這裏に到つて又作麼生。若し、透關底の眼、轉身の處無くんば、這裏に到つて、灼然として奈何ともせず。且く道へ、如何なるか是れ透關底の眼、轉身の處ぞ。試みに舉す看よ。」

「鑊鄒、」鑊鄒は寶劍の名、「吳越春秋」の一節に、「吳王闔閭、請干將作劍、干將者吳人、其妻曰莫邪、干將采五山之精、六金之英、候天地、伺陰陽、百神臨視、而金鐵之精未流、夫妻乃剪髮及爪、而投之爐中、金鐵乃濡、遂成一劍、陽曰干將、而作龜文、陰曰莫邪、而作漫理、干將匿其陽、出其陰、以獻闔閭、

闔閭甚寶重之。」とあります。さすれば、鏝鉚は莫邪にして妻女の作られし陰刀であります。知るべし、鏝鉚の中に干將も抱容してをることを。」今は師家たる人の活作略さりやくに喩ふ。——爲な人度生にんさしやうの殺活方便にも使用致します。

「透關底眼、轉身處、」透關底眼とは、佛祖が經歷なされし生死交叉の大難關、それを自在に通じ抜ける力を透關底の眼と云ふ、大悟徹底して得た處の正法眼であります。「轉身處とは、進退これ谷きばまるご云ふ處に於て、名劍士が刀先三寸にして身をかはす、ご云ふそれご同じく、尋常の人の如何ともなし能はざる處に於て自由自在に活路を開く、それを轉身の働と云ひます。

例せば、快川禪師が猛火の中に於て、安禪は何ぞ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば、火も自ら涼し、と轉身なされし如きがそれであります。」

此垂示は、趙州禪師の東門西門の一則を目標としての學者に對する教訓であります。「明鏡臺に當つて妍醜自ら辨ず、」正師家の胸中、要するに一面の古鏡あるのみ。古鏡は明鏡中の明鏡で、三世の諸佛、歴代の祖師、互に單傳受持し來りし那一鏡、仲秋稀に見る明月、その如く一點の雲あるなし。明更に明、——清更に清。——故に總ての真相、一切の實體、映出せざるなし。美人來れば美人、醜婦來れば醜婦、——花至れば花、鳥

至れば鳥、山でも川でも、至るもの來るもの悉く、其真相、其實體、寸毫も覆藏する能はず、全部全體、照破し去り、照破し來る、照却し來り、照却し去る、それが正師家の正法眼であります。敢て眼光爛々たる驚人的の大眼玉でなくとも、能く四天下を照破する正師家の正法眼は實に恐るべし敬すべし。——昔は知らず今日恁厯の正法眼を具する正師家ありや。——

「鑊、手、に、在、り、殺、活、時、に、臨、む、」千將鑊と云うて天下に誰一人として知らざるものなき有名なる寶劍である。是を禪家では般若の智劍とも、金剛王寶劍とも云ふ。此劍は大死一番する時に始めて大活現前する。——未だ曾て大死一番せざる人は夢

にだも見る能はず、見る能はずとは云ふもの、お互は元來具有して居るのであります。只遺憾のことには大死一番せざるが爲に殺活自在の働が出来ぬのであります。

苟も正師家と云はるゝお人は、何れも大死一番なされたお方であります。故に全體が般若の智鏡、全身が金剛王寶劍、臨機應變、隨處隨時、殺すべき時に殺して殺し盡し、活すべき時には活して活し盡す、——活して活した痕を止めず、殺して殺した迹を残さざる、それが鑊の徳、——一切の事物を照破して、其痕迹を止めざる、それは明鏡の徳。——明鏡の徳と鑊の徳を具備なされし人は趙州禪師、圓悟禪師、雪竇禪師、

何れもその人であります。——若し夫れ是を廣義に云へば、諸君も、私も、お互が大なり小なり、明鏡の徳と、鑊の徳がなければ、暫時も人として生活は出来ませぬ。又出家沙門として、世の中には立てません。然るに曲り曲りにも世の中に立つて居ることの出来ませぬのは、明鏡の徳と、鑊の徳があるが爲であります。「漢去り胡來り、胡來り漢去る、死中に活を得、活中に死を得る、」是は正師家、そのお人の宗通説通の自在底を云うたもの、——正師家の所持さるゝ古鏡は煩惱妄想の雲煙一點もあるなし。故に來るもの至るもの、出るもの現するもの、變體變化に妙を得たる九尾の老狐と雖も、九尾の老狐そのまゝの

本體が映る。——正師家の所持さるゝ鑊は金剛王寶劍、常に紫電閃々であります。故に人觸るれば人、馬觸るれば馬、玉でも石でも、鬼でも蛇でも、有形の物は元より無形の物と雖も、一刀兩斷、快刀亂麻の切れ味、蓋し知る人ぞ知る、さして措きませう。

「到這裏又作麼生、」以上の如き古鏡を所持なされた正師家の面前に立ち、以上の如き名劍を所持なされた正師家の劍下に出で、圓轉自在の活動、出沒自由の妙行、それが出来ねば依草附木の精靈、——文字に束縛され、言語に執着し、凡を嫌ひ、聖を愛し、迷を拂ひ、悟を求むる、それも依草附木の精靈、——

依草附木の精靈とは獨立獨行の力なき、そのものそれでありま
す。蓋し獨立獨行の力なくして、他に自己の鼻孔を把握せらる
、漢は、要するに透關底の眼、轉身の處なきが爲であります。

——決して人様の身の上話ではありません。お互が、一切處、
一切時に處して圓轉自在の活動、出沒自由の妙行が出来ますか、
禪學者の惡癖、——口頭禪の習慣として我に透關底の眼あり、
我既に轉身の處を解せりこ云ひつゝ、愈々と云ふ場合に臨んで
灼然奈何ともなす能はざる禪學者が古今を通じて多いのであり
ます。——

本則の間僧の如きも其一人であります。然らば透關底の眼、

轉身の處とは、畢竟如何なるものか、趙州禪師の如きは透關底
の眼、轉身の處を充分お手に握り、今方に爲人度生の眞最中、
——親しく去つて趙州東門西門の則に參じ眞箇透關底の眼、
轉身の處を悟得せざるべからず。——

◎本則

舉、僧問趙州、如何是趙州、州云、東門、西門、南門、北門、

讀方

舉す。僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ趙州。」州云く、「東
門もあり、西門もあり、南門もあり、北門もあり。」

趙州禪師のことは第二則の處で述べて置きましたから重ねて

申し上げる必要はありません。否、然らず、是非とも申し上げ置く必要が大いにあります。趙州禪師の如きは、正師家中の正師家、故に明鏡の徳、鑊錫の徳、其雙用、其雙活、其雙轉、其雙行、其雙動底の脱洒自在は、——實に恐讚敬賞するに餘り有りであります。茲に其一例を舉して然る所以を實證致しませう。

一日鎮州の大王、趙州に至る。侍者之を趙州禪師に告ぐ、云く大王來也、大王が御光來になりました。趙州禪師曰く、大王萬福、と早や既に大王の健康を祝しました。侍者云く、大王彼方に在つて未だ山門に到らず、と辯解しました。すると趙州禪師

曰く、大王來也、と再び「大王來也、」を繰り返しなされました。

茲に趙州禪師の明鏡、鑊錫の兩徳雙拈底が十二分に顯現して居ります。諸君、趙州禪師の明鏡、鑊錫の徳光徳清が、お目にとまりましたか。——見るこき見え、闇昏々。——黃龍の南

禪師、趙州禪師恁麼底の商量を頌出して曰く、「侍者唯知奉客、不知身在帝京、趙州入草求人、不覺渾身泥濘、」と趙州禪師の透關底の眼を有し、轉身底の處を得て宗說共に拔群なることを云ひ得て妙なりと謂ふべし。——

「僧趙州に問ふ、如何なるか是れ趙州、」一日僧あり趙州禪師の面前に直立す。故宗演禪師は、「此坊主果して如何なる坊主

か、顔色漆の如く、眼光人を射る、煮ても焼いても喰へぬ坊主であらう、」と、如何にも問僧、その人の實體を實見なされたかの如く云うて居らるゝが、私の思ふには、それと正反對、神経質にして婦女子に近き小理窟家であつたかと思像致します。當、不當は暫く措き、何を問ふかを見てあれば、「如何是趙州、」是を驗主問と云ふ、趙州禪師何と答へらるゝかと鈎をかけたのであります。趙州と云ふは趙州城のある町の名であります。町の名である其地名を取つて人の名にすることもあります。か様な例は古今東西、甚だ少數ならず、殊に支那は尤も多い。滹山かたんであるとか、徳山であるとか、天台であるとか、百丈であるとか、

其地名を直ぐ様、人の名の代りに用ゐて居ります。そこで此問僧、若し地名であるご禪師が答へたら、我が面前に御座る御僧は誰ぞ、ご一本進上仕る心底、若し禪師が、それは山僧のここだ、ご答へたら、趙州城のここである、ご一喝を浴せ呉れんご、語脈を兩端にかけて問うたのであります。普通の凡僧であるなら必ず問僧の爲に充分油を搾られたことでありませう。處が老古佛と云はるゝ趙州禪師、これ位の驗主問に逢着してマゴつく様なお方ではありません。明鏡當臺、妍醜自辨、—— 鑊在、手、殺活臨時。—— 趙州禪師曰く、「東門、西門、南門、北門。」—— 趙州城に四門あるが如く山僧の處にも又四門が

ある。サア、東門からでも西門からでも、南門からでも北門からでも、勝手におはいり、——勝手氣儘にお出なさい、とは云はるゝものゝ、無門禪師の所謂無門の門でありますから、苟も入門を欲する者は、其資格ご入門の作法を知らねば、透關は出来ません。入門の作法を心得ず、入門の資格なき者が、透關をなさんと東門に向へば東門はビシヤリと閉鎖、西門に向へば西門はビシヤリと閉鎖、南門も北門も亦復然りであります。——

此無門の門は、如何なる強力者も力を以て開くことは出来ません。如何なる智者も智を以て開くことは出来ません。如何なる權威者も權威を以て開くことは出来ません。只禪定の定力の

み。八字に打開することが出来るのであります。——故に僧俗、

男女、智愚賢不肖を論ぜず、禪定の力ある人であるならば大手を振つて入門することが出来ます。在座の諸君、大手を振つて

趙州禪師の開放なされた御門に出入なされては如何。——處

が問僧は當がはづれ、豫想が違ひ、唯呆然たるのみ。——さ

れど、是が多少の因縁となつて大悟されたかも知れません。

——本則に能く似たる公案が澤山あります。一例として左に

釋迦如來と或外道の問答を附記して學者の一考に供しませう。

或日一の外道、釋迦如來の前に來り、手に一匹の雀子を握つて

釋迦如來に問うて曰く、「此雀子死とせんか生とせんか。」其意思

は釋迦如來が、若し死を答へたならば、生なりと云うて放ち、若し生を答へたならば、死なりと云うて握り殺さん云ふ料簡でありました。「その手は桑名の焼き蛤」で、釋迦如來は既に外道の意中の那邊にありしを、明鏡當臺底、一見辨見、故に生も死も答へず、方に室を出でんとし、闕を跨いで外道を顧み呼んで曰く、是れ出せんか、入せんか。外道もさるもの既に我が意中を看破せられしことを覺り、合掌三拜して弟子の禮を取りしとあります。「自己の意思のある處を看破されたり、——其場に臨んで自由の分なきやうでは、透關底の眼、轉身の處を得た人は云はれません。」

◎頌

句裏呈機劈面來、 燦迦羅眼絕纖埃、 東西南北門相對、 無限輪
鏈擊不開、

讀方

句裏に機を呈して劈面に來れり。燦迦羅の眼には纖埃を絶す。東西南北、門相對せり。限無き輪鏈、擊てごも開けず。

「燦迦羅、」(聞いたまゝ、見たまゝのここを添へておきます。)
燦迦羅は梵語で、金剛、輪、精進等の三譯があります。圓悟禪師は堅固亦金剛と云うて居られます。燦迦羅眼と云ふ眼は要するに大悟徹底した人の正法眼と云ふ換言葉であること見るが穩當で

あります。或人は袈裟羅龍眼の意味であること云うて居られます。又或人は娑竭羅龍眼のことであることも云うて居ります。私は前に既に自白して置きました如く、無學文盲の者でありますから、果して何れが是と確定することは出来ません。古徳がたの遺書に依り以上申し上げた次第であります。願ふ所は、諸君、自分自身で眞箇の正法眼を豁開せられんことを。

雪竇禪師は、問僧に一花もたせ、句裏に機を呈して劈面に來る、と。此問僧は通常の凡僧に非ず、般若の智劍を眞向にかざし、趙州禪師を目がけ、一刀兩斷と鋒先鋭く、如何是趙州、と切りかけ、若し趙州禪師が、人で來れば、いや人にあらず、趙

州城のここなり、若し境で來れば、いや境にあらず、趙州禪師のここなり、と一問中に二様の賊機を含んでの出でたちは、さながら謙信が信玄に、如何なるか是れ趙州の露刃劍と切り下せしと説似、一物即不中であります。信玄であればこそ、紅爐上一點の雪と軍扇を以て美事に打ち拂ひました。若し信玄でなかつたら無論眞向梨割にされたことでありませう。

趙州禪師の如きは信玄以上の禪界屈指の老將軍、人境兩様の鋒先ぐらゐに、ビクともするものではありません。そこの處を觀透して雪竇禪師曰く、「爍迦羅眼絶纖埃、」と趙州禪師の正法眼、そのもの、明光、能く四天下を照破し、而して一點の塵埃

無く、ギラリと清徹、透徹、皎潔たる様子の一部を斯の如く吟
 じ出されたのであります。如何なるものでも趙州禪師の爍迦羅
 眼に照らされては、隠すことも遁るゝことも出来ません。況ん
 や問僧の如き、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つては。開口そ
 の時、既に趙州禪師の爲に徹底的、五臓六腑の表裏まで悉く觀
 見し了らるであります。可憐なるかな、眞向に振り翳したる賊
 機満々たる般若の利劍も、翳したまゝ下すに處無し、是を手持
 ぶさたご申します。——何が故に然るや、他無し、自己の力
 を計らずして二兎を逐ふからであります。一兎も得る能はず徒
 らに力を費すのみ。問僧の愚たる様子が、あり／＼と目に見え

ます。敢て此問僧に限りません。古今往々恁麼の問僧に似たる
 禪僧があります。云ふまでもなく、禪は兩端、又は二義、左右
 に跨るべきものに非ず。直入、單刀、守一、無二、然らざれば、
 禪の妙味妙處は、決して手に入るものではありません。——
 恁麼の問僧の如きは空手にして來り空手にして去るご云ふ一例
 であります。——されど、若し趙州禪師、その人に非ずして、他
 の宗師家であつたら、恁麼の問僧に、或はイヤと云ふ程、見るに
 見かねる程斬殺されたかも知れません。さすが趙州禪師、人に
 も着せず、境にも着せず、人をも捨てず、境をも捨てず、人境俱
 に奪ひ、人境俱に奪はず、而して問僧に辜負せず、東門西門南

門北門と落草なされた處は、實に唇皮禪の唇皮禪たる眞の骨髓を放出して餘りなしであります。——雪竇禪師もさるもの、

趙州禪師の底意を觀徹して、三句に「東西南北門相對」と趙州禪師を丸出しにされた。趙州禪師も雪竇禪師の燦迦羅眼に照破されては、如何ともなす能はず、萬事然るべき様に一任する外はありますまい。——東西南北門相對すこと云うても趙州城の門と趙州禪師の門と、東門と西門と相對し、南門と北門と相對すこと云ふことではありません。——盡大地が一箇の燦迦羅眼、それ／＼が門であります。要するに此門は出入、往來、開不開等一切あることなし。各々が燦迦羅眼で、各々が門であります。

是を第二義門に下り婆言を弄しますれば左の如しであります。

趙州禪師の燦迦羅眼と、圓悟禪師の燦迦羅眼と、雪竇禪師の燦迦羅眼と諸君の燦迦羅眼と、衲の燦迦羅眼と、天地の燦迦羅眼と、草木國土の燦迦羅眼と、犬牛鷄馬の燦迦羅眼と、看よ看よ、日々夜々門々相對して圓融無碍であります。華嚴經の御文を拜借して命名致しますれば事々無碍法界がそれであり、あります。

斯く申しますると、何人でも打開し、何人でも出入し得らるゝ様に思はれますが、否、然らず、「無限輪鎚擊不開」とあります。盡乾坤、全宇宙、處として門ならざるなし。見るとして門ならざるなし。聞くとして嗅ぐとして觸るゝとして門ならざる

るなし。無量無數無際の門であります。されど、實を云へば敢て開かずとも、殊更に出入せずとも、そのものそれ自身が、其儘にして居れば、それが美事の開門、——それが美事の出入であります。然るを自分と自身で無門の處に向つて門を建て、出入なき處に於て出入を設く。故に彈指を用ゐずして易々開く門が、無限の輪鎖を以て撃開すると雖も堅く閉鎖して開くことの出来ぬ様になるのであります。其實證は本則の間僧がそれでありす。

二兔を逐ふたり、二義に渡つたり、左右を見たり、兩端に跨つたりしては、喩へ手力雄命たぢからそのみことの力、朝比奈、板額、樊噲はんかいの如き

腕があつても、趙州禪師の門は到底打開することは出来ません。

——秋野氏曰く、「趙州禪師の門は迷ひだの悟りだのを離れて居る所謂無門を以て門として居るから、中々開けも碎けもせぬ。故に迷ひだの悟りだのと云ふ鎖を持つて打つても開かぬ。」と云うて居られます。御説御尤もであります。苟も趙州禪師の無門の門を打開せんと欲せば、無論迷悟、得失、是非、大小、長短等の妄想で出来て居る鎖では、盡未來際の歲月を費しても打開はとともくであります。然らば如何にすべき。

門、既に、爍迦羅眼、爍迦羅眼の門を、打開するには、爍迦羅眼を用ゐざるべからず。所謂、機を以て機を奪ひ、槪を以て槪を抜く。

之、是、を、活、禪、と、も、活、法、と、も、又、は、活、機、輪、こ、も、申、し、ま、す。三、世、の、諸、佛、歴、代、の、祖、師、之、是、の、活、禪、活、法、活、機、輪、あ、る、が、爲、に、三、世、の、諸、佛、ご、敬、せ、ら、れ、歴、代、の、祖、師、と、敬、は、る、の、で、あ、り、ま、す。然、ら、ば、如、何、せ、ば、可、な、ら、ん。曰、く、心、身、脱、落、脱、落、心、身。——心、身、脱、落、脱、落、心、身、の、見、性、悟、道、底、が、確、實、で、な、け、れ、ば、善、事、を、な、す、も、皆、惡、事、吉、事、を、な、す、も、悉、く、凶、事、惡、魔、外、道、と、云、う、て、別、に、惡、魔、外、道、は、あ、り、ま、せ、ん。心、身、脱、落、脱、落、心、身、せ、ざ、る、其、人、そ、れ、が、惡、魔、外、道、で、あ、り、ま、す。私、な、ぞ、も、惡、魔、外、道、の、一、數、で、あ、り、ま、す。諸、君、は、ご、う、か。——無、論、惡、魔、外、道、で、は、あ、り、ま、す、ま、い。——

(以上昭和十一年十一月二十八日講演)

67
527

昭和十二年七月八日印刷
昭和十二年七月十五日發行

發行兼
印刷者

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井會名會社内

發行所

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井會名會社考査課

終

